梶井基次郎論

□

鈴木二三雄・著

有精堂

鈴木二三雄（すずきふみを）
1910年東京に生まれる。
立正大学文学部卒業。
現在，フェリス女学院大学名誉教授。
日本近代文学会会員，日本比較文学会
会員，昭和文学会会員。
《主な論文》「若松賤子と女学雑誌」
「太宰文学の特質について」「八木重吉
の詩について」「太宰治と中国文学」

梶井基次郎論　ISBN 4-640-30576-1 C 3091

1985年7月20日　初版発行　　定価3000円

著作者　鈴木二三雄
発行者　山崎　誠

〒101　東京都千代田区神田神保町1-39
発行所　有精堂出版株式会社
電話　03(291)1521～3番　振替 東京 9-40684

Printed in Japan

梶井基次郎論——目　次

I

心象風景の文学 —— 2
梶井文学の幻想性 —— 38
梶井文学と自然 —— 57
梶井基次郎の文体 —— 68
レトリックから見た梶井文学 —— 77
—譬喩を中心に—
志賀文学へのアプローチ —— 95
梶井基次郎と伊藤整 —— 124

II

憂鬱の系譜 —— 136
—ボードレールから梶井基次郎まで—

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

諧謔文学 —— 151
「のんきな患者」について —— 159
梶井文学における「旅情」について —— 173
三好達治と梶井基次郎 —— 182
*
あとがき —— 204
初出一覧 —— 206

part

I

心象風景の文学

1

梶井基次郎の作品は完成されたものとしてわずかに二十篇、遺稿まで入れても三十数篇にしかならない。しかもそのほとんどが短篇である。近代作家の中でも中島敦と並ぶ寡作な作家で、従って生前は一般には知られなかった。彼の最晩年の病中、友人三好達治の手によって短篇集『檸檬』が上梓され、始めて文壇に梶井の名が認められたが、その十か月後の昭和七年三月二十四日、惜しくも病のため三十一歳の若さで此の世を去った。文壇の流れに対して、水泡にも等しい彼の文学が、今日文学史に立派に残されている、その意味は一体どこにあるのであろうか。

梶井文学の特徴は、胸部疾患の病人に特有な無意識的な死の危機感が、現実との違和によってさまざまな形（「檸檬」における『不吉な塊』のごとき）をとり、点描される具象と錯綜しながら、しかも

異常なまでに尖鋭な感性によって、そこに精緻な彩りの心象風景を、極めて詩的に点滅させて行くところにある。しかもそれでいてその作が、少しも病的な陰惨なものに陥っていないのは、病的心理と逆比的に彼の精神内部に昂揚される文学への情熱とが相克して、見事に止揚されているからなのである。このアウフヘーベンされたところに一種の健康的な明るさをもって開花する心象風景にこそ梶井文学の本領がある。

梶井文学は大体東京を中心とする時期を第一期、伊豆湯ヶ島を中心とする時期を第二期、大阪を中心とする時期を第三期というように分けて考えるのが普通のようであるが、彼の文学意識の流れを考える時、その内容は前記三期の区切りと必ずしも一致しない。例えば湯ヶ島で書き上げた「冬の日」は、前半の一部は既に東京で書き始められており、その内容も意識的には「檸檬」以下に続くようである。また第三期に属する「闇の繪巻」や遺稿となった「鍼熊享」や「温泉」など、単に題材を伊豆湯ヶ島にとっているというだけでなく、内容から考えると、第二期の「蒼穹」や「筧の話」に連なるものとした方が便宜であると思われる。従って前期三期説は内容からではなく、発表の日時順に分けた区分に過ぎない。

初期の代表作「檸檬」の冒頭に、彼は「えたいの知れない不吉な塊」という命題を提示している。彼の病鬱から来るこの〝不吉な塊〟によって象徴される執拗な憂鬱、何ともいいようのない嫌悪感、焦燥は、あたかも毎日酒を飲んでいると必ず宿酔が来るように、〝それが来た〟のだと形容する。この始めに描かれている想念の世界、それは彼自身の青春の憂鬱であり、倦怠であり、嫌悪感なのだ。

しかもそれらは青春のある時期におけるデカダンスに通じるものでもある。

風景にしても壊れかかつた街だとか、その街にしても他所他所しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが轉してあつたりむさくるしい部屋が覗いてゐたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に歸つてしまふ、と云つたやうな趣きのある街で、土塀が崩れてゐたり家竝が傾きかかつてゐたり——

という〝何故か見すぼらしくて美しい〟ものに強くひきつけられ、過去の京都の裏街が彼の想念に蘇ってくる。この風景描写は、「城のある町にて」における具象的な描写とは違って、荻須高徳がパリーの裏街を好んで描くように、頽廃の美にひかれる彼の心象を表したものである。そしてそれはまた彼のデカダンスの心象が過去の頽廃の街の風景にデフォルメされていること示しているのである。

梶井のデカダンスは二十世紀の青春が持つ一面の現れともいえるであろうが、彼の場合単なる社会の不条理や抑圧に対する反撥ではない。その根底には肺結核という不治の病的素因が根深くわだかまっていることを考慮すべきであろう。それは現在のような新薬や新しい治療法がまだ十分でなく、転地とか栄養とかの消極的療法が普通とされていた当時、一度肺結核と診断されると長期の療養を守らなければならない。故に単調な療養生活に対して、精神的に打ち勝つことができず、神経衰弱に陥るか、若しくは逆にデカダン的な態度に出て自ら身を滅ぼすかの何れの道を踏むしかなかった。彼は三高

に入学した翌年（一九二〇年）五月肋膜炎に罹り、学校を休学療養している。そして三重県牟婁郡船津村の義兄の家に転地し（おそらく乾性肋膜炎ではなかったか）、二か月後には大阪の実家に戻っている。その頃友人畠田敏夫に宛てて、「田舎で送つた焦燥と自己嫌悪との墮落時代」ということばで精神的な打撃を受けたことを書き送っている。さらに九月には肺尖カタルと診断され、大正十一年の一学期は幾日も学校へ出ず、ほとんど欠席という状態であった。その間友人達と接する機会は少く、仲間から取り残されるいらだち、学業への不安、憂鬱はますます孤独感をも深めて行った。「空梅雨が續いて嫌だ、梅雨にはやはり降つてくれないと氣持が惡い、試驗にはあと一週間だけど学校へはまだ五日しか出席してゐない、無暗に淋しくて仕方がない。この頃眠られない幾夜を蚊に喰はれながら過してゐる。」[1]と宇賀康夫に書き送り、その書簡の終りに「かゝる時ふと畏ろしき死をひそやかにいためる胸にわれはかり見る」と短歌を添えて死の危機感をほのめかしたことばを示している。しかし彼の生命力はそれに反撥して積極性を志向し、その現れはデカダンスというかたちを取って行く。友人中谷孝雄は、当時の梶井の心境を彼自身に語らせるならば「借金と學校の缺席とから來る壓迫、それから毎夜酒のため荒廢し盡した私の神經とが釀し出す悲慘な狀態こそは私といふ熊がいつも擒へられる陷穽であつた。私は七度擒へられ七度放たれても八度そこへ落ち込むのだつた。私はその度毎にぐるりを見廻し、いつもの奴だと氣がつくのに極つてゐた。さうすると慌ててはは勇猛精進、自暴自棄、後悔、祈禱、そればかりではない、自殺、超人、『人生論』『宗教論』の戸毎へまでも慌しく馳けまはり、懐疑的になり、憂鬱になり、そして顯著な神經衰弱になつてしまふのが常であつた。[2]」として、思うに当時の梶

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井は非常に淋しかったのだ。それは一口にいえば精神的な飢えであったのだろうが、卑俗な日常生活の乱れからもその淋しさは来ていた、と語っている。いわば梶井のデカダンスは病気を素因とする深い孤独感の現れであり、懐疑、憂鬱は彼のいう「不吉な塊」に連関して行くものであるが、彼の場合そのデカダンスは彼自身を破滅に追いやるものではなく「俺は刻々と偉大になつてゆく。考へて見ると俺の結晶は素敵に長くかかる様な氣がする。それだけコンパクトな麗しいものが光を放つ様になると思つてゐる。混沌（カーオス）は段々廣がつてゆく卽ち偉大なる宇宙（コスモス）を造るために。偉大となる爲に自分は頑固も暴力も豹變もみな肯定する、偉大を目的とするマキヤベリズムを認める。汝も偉大になつてくれ。默りこくつてうんうん成長しろ。俺達が一つの强大な星座となる日を讃へよう。[3]」という、彼の精神をより高度な次元へと飛躍させる一種の跳躍台であり、極めて積極的な生への充足を意味するものであった。これを裏付ける友人の言葉をつけ足すと「梶井は愈々精神的になると共に愈々頽廢的になるのである。女色はもちろのこと泥醉のあと甘栗屋の鍋に牛肉を投げ込んだり、中華蕎麦の屋台をひつくりかへしたり、借金の重なつた下宿から逃亡したり、自殺を企てたり……乱暴の限りをつくす。思ふに鋭敏にすぐる感受性を賦与された梶井にあつてはこれら無頼の生活は、眞實を探求する心の逆説的表現であつたのであらう。愚かしい、しかしそれ故に眞劍な青春である」と淀野隆三は語っている。

梶井のたくましい生命力はデカダンスという一つの跳躍台によって、彼の精神内部に勃然と起る異常な情熱が尖鋭な感性をより文学的に昂揚させて行くが、〝不吉な塊〟は依然として消滅しない。すなわち「檸檬」から「泥濘」へと尾を引いて行く。例えば「泥濘」の中の創作のまとまらない焦慮

を、

花が枯れて水が腐つてしまつてゐる花瓶が不愉快で堪らなくなつてゐても始末するのが億劫で手の出ないときがある。見る度に不愉快が増して行つてもその不愉快がどうしても始末しようといふ氣持に轉じて行かないときがある。それは億劫といふよりなにかに魅せられてゐる氣持である。自分は自分の不活潑のどこかにそんな匂ひを嗅いだ。

の不愉快や倦怠や、「沼の底から湧いてくる沼気(ノタン)のやうな」いやな妄想、「肉親に不吉がありさうな、友達に裏切られてゐるやうな妄想」となり、電報配達夫が走っているのさえ不愉快な感情を抱くようになる。それはまた「春先からの徴候が非道くなり、自分は此の頃病的に不活潑な氣持を持てあまして」(「路上」)に象徴され「精神の不健康、億劫、憂鬱」(「橡の花」)という一連の言葉となり、「ある心の風景」では「晝間でも人通りは尠く、魚の腹綿や鼠の死骸は幾日も位置を動かなかつた。両側の家々はなにか荒廢してゐた。自然力の風化して行くあとが見えた。紅殻が古びてゐ、荒壁の塀は崩れ、人びとはそのなかで古手拭のやうな無氣力な生活をしてゐるやうに思はれた。」と荒廃した街の風景を点描しながら、友人に「君は何処に住んでも直ぐその部屋を陰鬱にして仕舞ふんだな」といわれ憂鬱の観念と具象とが交錯した心象を描き出して行く。しかもこの作の終りの章では、闇の中の木に一点の蒼白い光を見出し、それが次の夜もその次の夜もその光を見、遂には彼が寝床の上に横になる部屋

の闇の中にまで燐光のような光を感じ、「私の病んでゐる生き物。私は暗闇のなかにやがて消えてしまふ。然しお前は睡らないでひとりおきてゐるやうに思へる。そとの蟲のやうに……青い燐光を燃しながら……」とここにも彼の心に巣くっている、どうにもならない不敵な生き物は、いかなる抵抗にも屈せず彼の心から離れ去ることをしない。この現実は暗闇に蒼白く光る燐光であると同時に、それは彼の肉体を蝕む病魔であり、また彼の精神の内部にわだかまる不吉な塊の象徴でもあったのである。

梶井文学はこのようなモチーフから出発しており、またその文学は私小説の系統に入れられるものであるが、その作品は不思議にもよく私小説の作品に見られるじめじめした暗さで覆われるということがない。これは彼の天賦の性である尖鋭な感性と純粋にして緻密な、しかも冷厳に（己れをさえ）見る観察性に加えて物事を明るく見ようとする資質（人によっては楽天的とも見える）と文学に対する烈しい情熱とから成り立っているからなのである。

例えば「檸檬」における憂鬱に沈潜した精神はやがてそれと対角線上にある美しいもの、明るいものにその慰謝を求める。それも子供が買う「安つぽい繪具で赤や紫や黄や青や、様ざまの縞模様を持つた花火の束」や「びいどろと云ふ色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉」、それを口にした時に感じる幽かな爽やかな詩美といったような味覚、プリミティブな美しさに引かれた幼時の回想が蘇り、現実には丸善で「赤や黄のオードコロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持つた琥珀色や翡翠色の香水壜。煙管、小刀、石鹸、煙草。――そして結局一等いい鉛筆を一本買ふ位の贅澤」という絢爛の美に心を酔わして紛らす。憂鬱と快楽という

両極に張られた細い一本の線が緊張して一寸触れれば忽ち幽かな音を立てて切れるような破綻を起す際どい均衡を保っている彼の心。しかもそこに示される繊細な彩りの濃やかさは、あたかも岸田劉生の印象派的な緻密さを思わせ、そして絢爛の美の頂点に「レモンエロウの繪具をチューブから搾り出して固めたやうなあの單純な色も、それからあの丈の詰つた紡錘形の恰好」をした一顆の檸檬を見出す。それから丸善の店に入って書棚から手当り次第に画集を積み上げ、その上にやがて爆発するであろう檸檬をそっと置いて、何食わぬ顔をして店を出る。というこれは単に諧謔といえばそれまでであるが、それは表面に表された一種のバフーンであってその裏側には言い知れぬ現実嫌悪が隠されているのである。「彼の倦怠や憂鬱がわずかに一顆の檸檬によって晴らされたことを書いたという以上に、一顆の中に彼の豊かな内的経験のすべてを圧縮した、いわば一瞬の裡に檸檬を彼自身の象徴と化しおえた」[4]と見るべきであろう。すでに山本健吉、福永武彦氏等が指摘しているように、この「檸檬」は「秘やかな楽しみ」「『檸檬』を挿話とする断片」「瀬山の話」を経て梶井の内的経験が次第に中心に向かって圧縮され、棄て去れるものは総て棄てた最後のものであることは、この創作過程が明らかに示している。

中谷孝雄は「梶井の性格の特色の一つは人一倍ユーモラスなことであったが、それは彼の作品には殆ど現れていない。ただ最後の作品『のんきな患者』にその一端の現れを見るにとどまる」[5]といっているが、ユーモラスとは韜晦に他ならず「のんきな患者」以前この「檸檬」に既に現れている。

小島信夫は「『檸檬』からはじまって『のんきな患者』にいたるまでこの病気の裏打を感じさせぬも

のは一つもない」[6]といっている。が「檸檬」に続いて発表された「城のある町にて」は、異様に平明で健康的な空気を漂わしている作品である。

一つには、可愛い盛りで死なせた妹のことを落ちついて考へて見たいといふ若者めいた感慨から、峻はまだ五七日を出ない頃の家を出て此の地の姉の家へやつて來た。

ぼんやりしてゐて、それが他所の子の泣聲だと氣がつくまで、死んだ妹の聲の氣持がしてゐた。

「城のある町にて」の最初の章に、この町に来た理由を述べている。が幼い異母妹の結核性脳膜炎による死が急であった為か、葬儀の慌しさからその悲しみを実感できなかったというのであるが、妹の死が、どんなにか彼の心を傷めたことか。それは友人近藤直人に宛てた次の書簡からも、その傷心を汲みとることができる。「思つてみれば歸つてから看病　死　葬　骨揚げ、まるで夢の様に過ぎてゆきます。もう初七日だといふのに嘘の様な氣がします。

考へて見れば私は知識観念の上ではそれらを經て来たのに違ひないが感情の上ではまだ妹の死にも葬ひにも會つてゐないと思はれます。

感情の灰神樂！

妹の看病をしてゐる時私はふと大きな蟲が小さな蟲の死ぬのを傍に寄添つてゐる――さういふ風に

私達を想像しました　それは人間の理智情感を備へてゐる人間達であると私達を思ふよりより眞實な表現である様に思はれました、全く感情の灰神樂です。

夕立に洗はれた静かな山の木々の中で人間に歸り度いと思ひます。」

とその気持を告白している。悲しみをはるかに超えた光の世界、静かで平和で落ち着いた明るさを持つ城下町の自然は彼の傷心を癒し、精神をこの上もなく健康的なものにした。城址の中にある神社の桜の樹に生の歓喜を奏でる法師蟬や小高い城址から見える松阪の街並み、黝い木立。百姓屋。街道。そして青田の中に褪赭の煉瓦の煙突。このレンブラントの素描めいた風景、また姉の子供達の無邪気な生活に触れるにつけ、いずれも健康で幸福な光の中にある牧歌的な雰囲気に浸って、思わず少年時代の唱歌が蘇ってくる。単純で、平明で、健康な世界、今その世界が、憧憬の対象が、客観的な鮮やかさをもって彼の心象風景を作り上げて行った。

例えば「城のある町にて」の中で、城跡から伊勢湾を眺める描写がある。海岸に沿って所どころに立木があり、その蔭に人家がある。その後ろには舟が舫っていると思われる。という描写がある。現実に彼の目前の風景は、海に面した何処にでもあるごく平凡な風景である。しかし彼は妙に心を惹かれている。何故であろうか。それは、日が照ったり翳ったりした時、風景の感じが見るみる変ってしまうからである。まことに後期印象派の画家達が光の変化によって、そこに異なる色彩を感じ取って画にしたように、彼も平凡な風景を眼の前にして、色彩感と光彩感とが交錯したところに感じる詩的な美を其処に感じ取っているからなのであろう。優れた芸術とは、いかに平凡な現実であろうと、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com